

家族物語 上

瀬戸内晴美



家族物語^①

瀬戸内晴美

江苏工业学院图书馆
藏书章

家族物語 かぞくものがたり 上

一九八八年五月二〇日第一刷発行

著者——瀬戸内晴美 せとうち はるみ

© Setouchi Harumi 1988, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二 振替東京八—三三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一、二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN4-06-203658-4 (1)

(文1)

目

次

芙蓉

129

ハン
モ
ツ
ク

103

鵜飼

79

河
明
り

55

白
桔
梗

31

蛭

7

風花

276

木枯し

251

柊

228

冬紅葉

203

木犀

176

波

151

家族物語

上

装画・高橋 秀

装 幀・山岸義明

螢

車を降りると、いっせいに蛙の声が鳴きたてた。

門の前の稲田の早苗が、夜目にも青くのび揃っている。

並木啓一郎は田に向かって立ち、空を見上げた。

梅雨の厚い雲が重く垂れこめている中に、ところどころ、雲のはころびのようなどころがあつて、そのひとつから、ふいに白い月影があらわれた。梅雨の月という季節があつただろうかと思ひながら、十三夜らしいややいびつの月を見上げていると、たちまち、煙のような雲がひろがり月の面をおおっていく。かくされてみて、月には光がなく、曇った鏡のようだつたと思つた。

運転手の芝田が、

「お帰りになりました」

と、門にとりつけたインターフォンに、声を送っている。

門から玄関まで、ゆるい勾配の小径が前庭にのびていて、勝手口の脇の女中部屋までは遠い。妻の真穂より並木家には長く居ついているみねが、門を開けに来るのは、いつでも手間どつた。せっかちな芝田は、馴れている筈なのに、その都度苛々して氣をもんでいる。

稲田の向こうにその何倍か広い畠がひろがり、その彼方に黒々と釈迦堂の森が見える。

まだその奥に京都タワーが蠟燭のように小さく光っている。

この稲田や畠もいつまで残るだろうかと思つた。年々に田畠や竹林が開拓され、人家が立ち並んでゆく。嵯峨野の風情などというものも、年々破壊されていた。

そういうこの家だつて、畠を造成した場所だからな。啓一郎は他人のことをいえた義理かと苦笑しながら、蛙の声を背に回した。

「帰っていいよ」

そういつても、門が開くまで決して引きあげない芝田の律義さを知つていながら、啓一郎はいつた。

その時、ようやく門の門を外す音がした。

「おそうなりまして、鈍なこと……お帰るなさいませ」

それも毎晩決まりきつた言葉だつた。

小柄なみねが、この二、三年いっそう縮かんだように見えるからだの前で、木の厚い門を左右に開いた。

「ごころうさん」

というみねの声を受けて、芝田が車に戻る気配を背後にしながら、啓一郎は湿った夜気の中をたどつた。

草と樹と花の匂いが夜気にこもつていて、まつわりついてくる。ふと、みねはいくつになつたのだろうかと思ふ。十五の時から並木の家に奉公に来て、二十二で嫁に行き、夫に戦死されて帰り、

二度奉公に来てからだって、もう忘れるほどの歳月がすぎている。どっちにしても六十二になる自分よりは上の筈だ。

「旦那さま」

みねの声がふいに、囁くように背後でした。

「はたるが……そら、その沙羅の花の下に……」

玄関の脇に黒竹の一群と、一本の沙羅双樹がある。

いつ咲いていたのか、啓一郎の知らない間に、今年も柔らかく重なりあった葉のかげに、ひっそりと白い花が咲き、なおいっそうひそやかに散っている。

杉苔のぼつてりとひろがった上に落ちた沙羅の花は、まだ傷みもなく、色も形も、樹上のままの端正さだった。

その落花のひとつのかげに、螢が一匹とまっていた。

源氏螢なのか、普通より大きく見える。青い透明な光が冷たく、その光の輪が、苔の深緑を鮮やかに闇の中に浮きあがらせている。

苔の上の白い花びらにも、青い光が滲んで、苔の青さとも螢の光の青さとも見分け難いうすみどりの淡い翳が、沙羅の花びらを染めていた。

美しいものを見た、と啓一郎は思い、軽く息を押さえた。その瞬間、水野ゆかりの白い長いうなじのほくろが臉をよぎった。

清潔な感じの中でも、とりわけ耳と、耳のうしろの首すじが清らかに見えた。ほくろはその清らかな白さをいっそう際立たせるために、わざと描かれたように見える。

沙羅の花に映った蛍の透明な光の美しさと、水野ゆかりの白いうなじの清らかさが、啓一郎の臉の中で重なりあう。

今夜はゆかりと外で食事をする予定にしていたから、帰りは遅いと、真穂に電話をいれておいた。

ゆかりが都合が悪くなったと、今日になって断ってきたから、啓一郎はこんな中途半端な時間に帰ってきたのだ。

馴染みのバーにも寄ってみたが、ここでも気転のきくママが上京しているとかで休み、面白くなかった。ブランドー二杯のんだだけで、梯子する気にもなれず帰ってきた。気分も中途半端で落ち着かない。

玄関に入っても、家のなかが森閑として、奥も暗い。

「みなさんで、さっきから清瀧へいっといやすのどっせ」と、みねがいう。

「何で、今頃」

「蛍見にいかりました」

「ああ、そうか」

「且さんは、今夜は遅うお帰りやと思うてはったようどっせ」

「うん、東京の客が来る予定やったのが来られんようになったから」

みねにまで、いわでもの言いわけめいた口調になるのがいまいしく、啓一郎はむっと口をつぐんでしまった。

「お食事は」

「まだだ。風呂のあとにする」

「東京の奥さんが、明日もうお帰りやすさかい、どうしても今夜、螢見たいおいしいやして」

そういえば久美子が、誰かの法事で知恩院へ来たついでに寄るといつてきていたが、今日だったのかと啓一郎は思ひだした。

兄弟の中でも、ひとりとは離れて遅く生まれた末っ子の久美子は、長男の啓一郎とは丁度一回りの年の差があった。

四十三歳で生んだ恥かきっ子だと、母は世間に気がねしながらも、その分また可愛さも一通りでないらしく、甘やかし放題に育てたせい、久美子は少女時代から家中で一番気儘にふるまっていた。

大学は東京でなければいやだといひはって上京し、卒業前には医学生と同棲した。

もともと血圧の高かった母の初江は、その時の心労で中風に倒れ、命を縮めたといつてもいい。結婚はして、その男の故郷の九州の町へ行ったが、五年としないで、久美子の方から飛び出している。男の子をひとり婚家へ残していた。

それ以来、義絶同様になつていた並木の家に、久美子が里らしく出入りするようになったのは、二度めの夫に死別してからだった。

湯に入ると、また蛙の声が空気がっぱいにひろがってきた。

湯殿は庭に面していて、広い窓を開け放つて入れるように、網戸がとりつけてあった。

みねが湯加減を見た時、窓を開けておいたのだろう。

蛙の声の中には、雨蛙や食用蛙の声もまざっていて、耳をすますと、まだいく種類かの声が聞きわけられる。

この声が虫の音に変わるのは幾月後だろうか。

こんな騒々しい蛙の合唱がうるさく感じられないのも、それが自然の声だからだろうか。

みねは心得ていて、湯はぬるめだった。

啓一郎は広い湯舟の中にゆったりと身をまかせながら、清瀧で河鹿を聞いたことがあったなと思いだした。

澄んだ河鹿の声が清流の底から湧き上がってきたのは記憶にあるが、それを誰と聞いたか思い出せない。真穂や家族たちとはなかったことだけは確かだった。祇園か先斗町の妓たちとだったか、仕事関係の客とだったか。とにかく誰も気づかなかったその声を、

「あ、河鹿が鳴いてる」

と、教えたのは、自分だったという思いがあった。

澄んだどこか哀切なあの声が醜い蛙の一種から発せられるのが不思議だった。

記憶によみがえった河鹿の声から、啓一郎はまた水野ゆかりの細い白いうなじと、少し冷たい横顔をくつきりと思い出した。

「申しわけございません……急に仕事の用が出来て、おうかがいできませんの」

電話の声はいつでも、事務的で愛想がない。

女の声には受話器を通すと、本物より甘くなる声と、機械的になる声がある。水野ゆかりは後者の方だと、啓一郎はいつも感じていた。関西弁に馴れている啓一郎の耳に、東京弁の陰影のなさ

が、そう感じさせるのかもしれない。

夜の清滝で河鹿を聞かせたら、あの女はどんな表情をするだろうか。

「嵯峨もすっかり変わったわね」

久美子が車窓から外を見ながら、つぶやいた。

「ここ、十年余りの間に、ほんとにすっかり変わってしまいましたよ」

東京育ちの真穂は、つとめて京都弁を使おうと暮らしてきたが、相手が標準語を使うと、たちまちそっちに引きこまれていく。久美子の標準語には、今もって京なまりがぬけないので、どこか柔らかくなんどりでいた。自分の京言葉はその分、いくら真似ても、きっと、ぎすぎすしているのだろうと真穂は思っている。

運転席から冴美が前を向いたままいう。

「この通りだって、今、もうお店が閉まっているからわからないけど、軒並み土産物屋なんだから」
「昼間、ちょっとひとりで歩いたから知ってるわ、凄く変わり様ね」

「でも、鎌倉だってひどいでしょ、あたし、去年の秋久しぶりで行って、びっくりしたわ、もう」
大学を東京ですませ、二年ほど東京で仕事をしていた冴美の言葉が、一番東京弁らしく聞こえるのが真穂にはおかしかった。

車はたちまち土産物屋の並んだゆるい坂道を上り、あだし野の念仏寺を通りすぎると、すぐ目の前に朱塗りの大鳥居が見えてくる。愛宕の一の鳥居で、その脇を過ぎ、鮎宿の平野屋の前にさしかかった。

古風な大藁屋根の、間口の広い店構えは、江戸時代のままで、浮世絵からぬけ出したように見える。屋号をいれた大提灯に灯が入り、表に出した二脚の床几の緋毛氈を夜目にも鮮やかに浮きあがらせていた。

客を送り出してきた女将が、赤前垂をかけた若女将と並んで丁寧にお辞儀をしている。

真穂は店と反対側の道端に車をとめさせて、客の一行を乗せた車が走り去ってから、車窓をあけ、首をだした。

「女将さん、さきほどはお騒がせしました」

「あ、奥さま、やっぱり、おいきやすか」

女将が車に近づいてきてまるい顎をあげるようにしている。清滝の螢はもう出ているだろうか、電話で訊いてみたからだ。今年はいつもおくれているけれど、ようやく出はじめたらしいという返事が返ってきたのだ。

「もし今夜お行きやすのどしたら、早い方がよろしおすえ、螢の出るのは、日の暮れから八時半頃までで、その後は、十一時すぎてからまた出るのや申します」

「へええ、知らなかったわ。螢って、一晩中光ってるのかと思うてました」

「へえ、やっぱり、虫さんにも何かと都合がありますのやろなあ」

女将の答えが面白かったので、真穂はそのままの口調を真似て、久美子を笑わせたのだ。

「今晚は……女将さんわたし誰だかわかる」

久美子が真穂の肩の後ろから首をのびしていった。女将の白い顔が、まだほのかに残照の残っている道の方へ近づいてきて、久美子の顔を覗きこんだ。